

編集後記

東京郊外の小金井市から愛媛の山奥に引っ越して、2年と少しが過ぎた。生まれ育った場所なので大きな違和感はないが、30年のブランクを経てこちらで過ごす時間は、東京のそれとはまったく異なる。ベースは「半農半編集」という暮らしである。しかし、当然ながら「半」はきっちり「1/2」のところにあるわけではなく、夏場の草が伸び膨大のときや秋の収穫期（大豆や小豆が主。今年は初めて水稻にも挑戦中）には、「農」のほうがウエイトが高くなる。また、「編集」という仕事は東京にいたときのようにはないので、それ以外のときも山の手入れとか道の草刈りなどの「外作業」がけっこう多い。

東京時代は、これからの予定を書くスケジュール帳しか持っていなかったが、こちらに来てからは「何をした」という作業日誌のほうが重要になってきた。農作業はいちばんには気候に左右される。しかし、それは去年はいつ頃タネを蒔いたというような経験知があつてのこと。長い経験から「お盆を過ぎたらソバを蒔く」というように、地方ごとにだいたいの農事暦は決まっているのだ。このように「これから」のことに加えて「これまで」のほうにも目を向けるようになったのは、私にとって都会と山暮らしの違いを象徴する端的な例だと思う。どちらも変わらないのは、パソコンやインターネットのない生活は考えられないということだろうか。私は日々の記録（作業日誌）をパソコン内に格納して、振り返りに役立てている。

そういう暮らしのなかで、今年も木俣先生に声をかけていただき、『民族植物額ノオト』のレイアウト作業をお手伝いさせていただいたことに心から感謝したい。改めて思うのは、植物が人々の暮らしをいかに支えているかということだ。食べる対象としてはもちろん、とくに山暮らしだと、生活のさまざまな場面で周辺の植物を利用しているのである。たとえば、私の母はもうすぐ80歳になるが、毎日のように畑作業をしている。そんな彼女が私に言う。「あそこのクズマイ（クズのこと）は切らんといてや」「わかった。なんかに使うん？」「あそこで枝なんかを束ねるとき、あれがあるとええんよ」。いつもヒモを持ち歩いているわけではないので、基本はそこにあるものを使う。丈夫なクズは、とてもよい縛（しば）りヒモになるのである。

もっと顕著なのは竹であろうか。ある人から、手入れされたものは「竹林」、放置されたものは「竹藪」という区別するという話を聞いて大きくなすいたのだが、その伝でいうと、わが家は間違いなく「竹藪」状態だ。それはともかく、竹ほど山の暮らしに欠かせない植物はないと思われる。そもそも大半の竹は、あとから人間が植えたものだ。大きなモウソウチクは、春には筍として食卓をにぎわせ、夏になると田んぼの水路の樋（とい）になるし、細かな枝の部分はつる性植物の支柱代わりになる。また、大きさが手頃で扱いやすいマダケは細く裂いて使うが、これは野菜にビニールをかぶせたりするときにたいへん重宝する。

昨今、「限界集落」の問題がクローズアップされているが、ここ四国ではそれが顕著で、わが集落も60歳以上の人が全体の半分以上を占める「準限界集落」となっている。周辺には「限界」を通し越して「消滅」へと向かう集落も少なくない。四国の山中をドライブしているとそんな集落に出会うことが多いが、家屋は朽ちても周りに「竹藪！」がいくつか残っていることが多い。ああ、ここにも昔は人が暮らしていたんだな。竹藪はそこに人がいたことを静かに教えてくれる。長い年月がたつとまた別の植物層になるのであろうが、一時の「ヒトの攪乱」を楽しむのも悪くないのかもしれない。そういう思いを抱きながら、今夏も草刈りに精を出す日々が続いている。

宮本幹江
(2012年7月)

